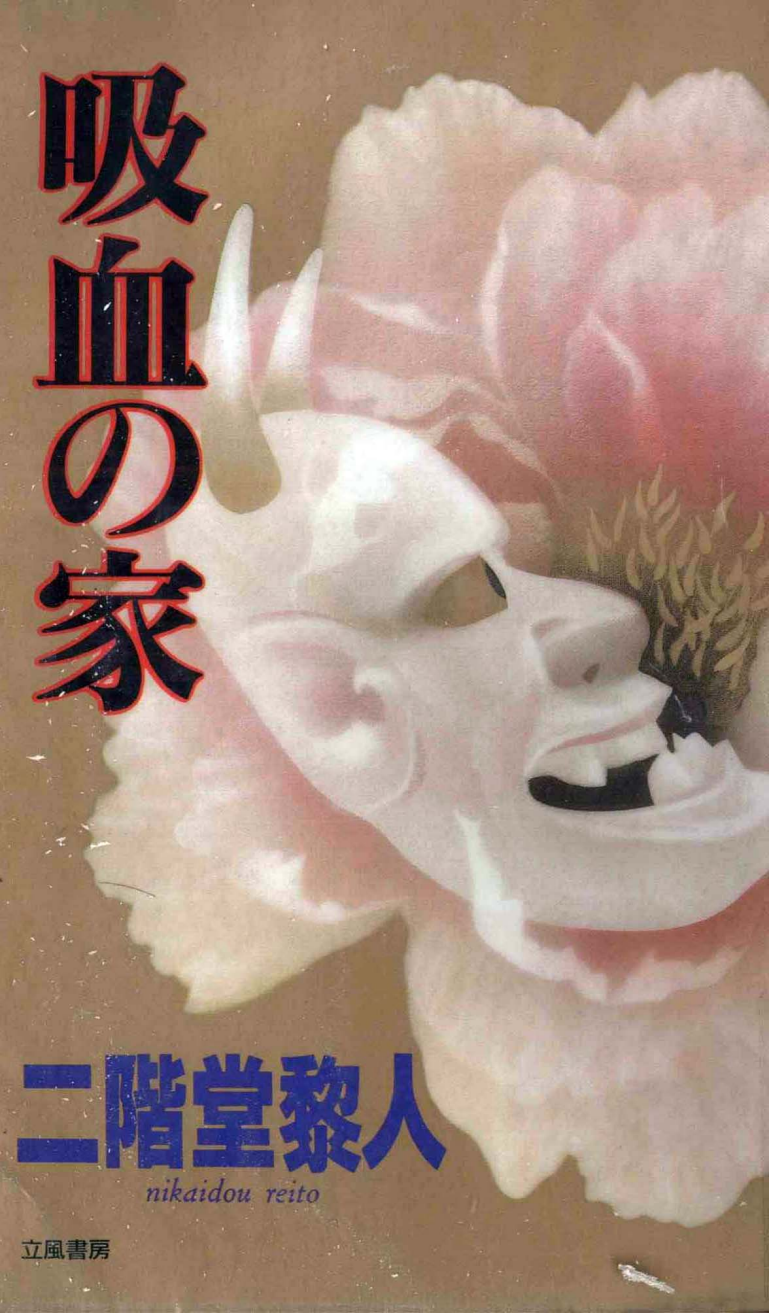
吸血の家



二階堂黎人

nikaidou reito

立風書房

〈著者〉にかいどうれいと
1959年東京都生まれ。中央大学理工学部卒。大学在学中は手塚プロ主宰の「手塚治虫ファンクラブ」の会長を務めていた。90年第一回鮎川哲也賞で『吸血の家』が佳作入選。著書に『地獄の奇術師』「吸血の家」（単行本版）「聖アウスラ修道院の惨劇」「悪霊の館」「ユリ迷宮」「軽井沢マジック」がある。小社刊「ミステリーの愉しみ」第5巻『奇想の復活』には「ロシア館の謎」が収められている。

吸血の家

一九九五年十月五日　初版第一刷発行

著　者　二階堂黎人（にかいどうれいと）

発行者　鎌倉豊

発行所　株式会社立風書房
〒一五三／東京都目黒区上目黒五丁目五番八号
電話／〇三（五七二一）〇四六一（編集）
〇三（五七二一）〇五六一（営業）
振替／〇〇一五〇—四—七四四九三

印　刷　信毎書籍印刷株式会社

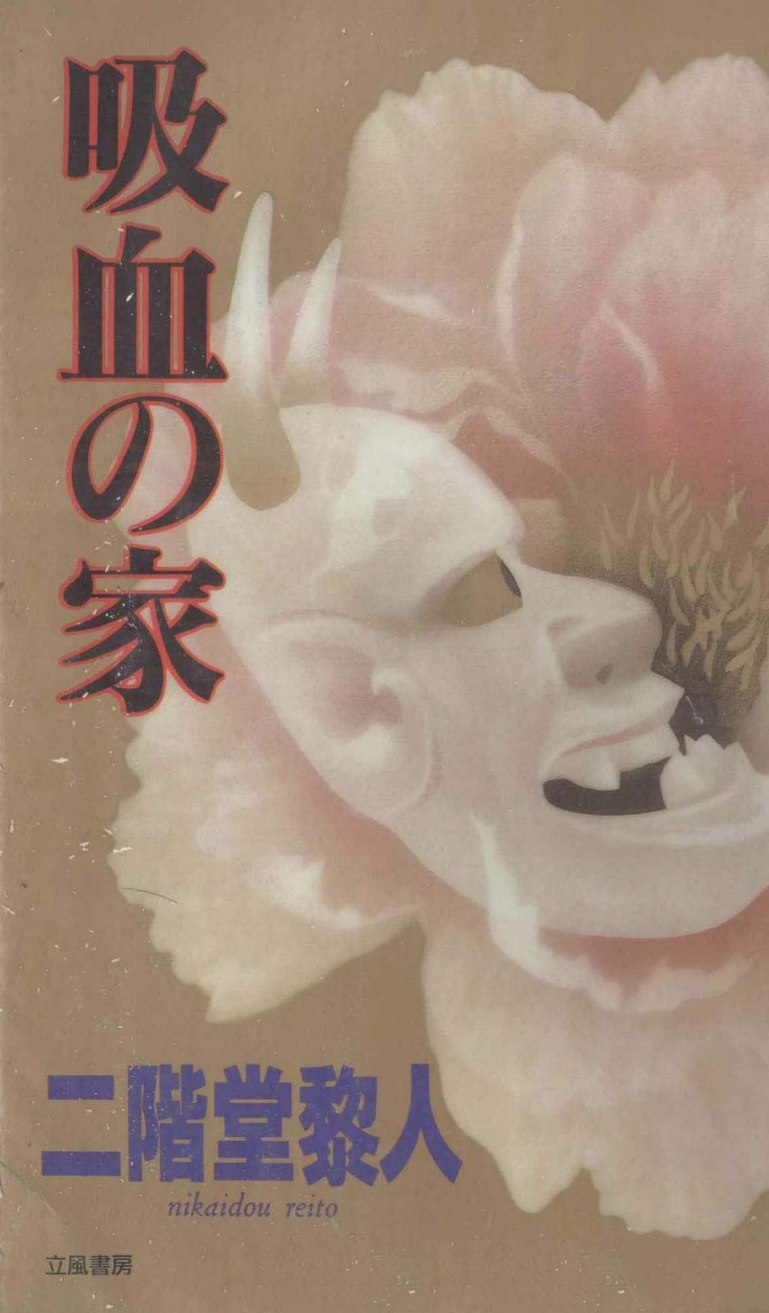
製　本　株式会社難波製本

© 1995 Reito Nikaidou　Printed in Japan

ISBN4-651-42054-0

落丁・乱丁本はお取替えします
無断複製（コピー）を禁ず

吸血の家



二階堂黎人

nikaidou reito

立風書房

ISBN4-651-42054-0
C0293 P980E
定価——980円(本体951円)

長篇本格推理
名探偵・二階堂蘭子登場

吸血の家

二階堂黎人
nikaidou reito

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erto

目次

《血吸い姫》の話 15

第一の血　白い魔術

第一章　雪の中の予言 24

第二章　蘭子登場 34

第三章　警部の来訪 50

第四章　毒殺魔 62

第五章　足跡のない殺人 70

第六章　過去なる亡霊 82

第七章　奇跡の講義 101

第二の血　呪縛浄霊

第八章　眠れる女 …… 118
第九章　血を吸うもの …… 135
第十章　教祖の笑い …… 149
第十一章　死を刻む時 …… 166
第十二章　闇の中の浄霊会 …… 184
第十三章　日本刀の殺人 …… 200
第十四章　窓の影の魔 …… 220
第十五章　呪詛復活 …… 236
第十六章　毒に至る病 …… 249

第三の血　吸血の家

第十七章　姿なき殺人 …… 262

第十八章　脅える巫女――274
第十九章　洋画の秘密――294
第二十章　殺人鬼――310
第二十一章　殺人の解明――329
第二十二章　恐るべき真相――346
第二十三章　吸血の家――364
注釈――379
参考文献――390
二階堂氏のこと／鮎川哲也――393

登場人物及び非登場人物

〈被害者及び容疑者〉

雅宮清乃（まさみやきよの）――雅宮家の先代の当主（昭和二十二年死亡）。
雅宮秀太郎（まさみやしゅうたろう）――清乃の夫（昭和十五年死亡）。
雅宮絃子（まさみやいとこ）――長女（47歳）。
雅宮琴子（まさみやことこ）――次女（45歳）。
雅宮笛子（まさみやふえこ）――三女（30歳）。
雅宮冬子（まさみやふゆこ）――絃子の長女（29歳）。
小川清二（おがわせいじ）――雅宮家の同居人（63歳）。
小川ハマ（おがわはま）――清二の妻（64歳）。
井原一郎（いはらいちろう）――軍人。絃子の恋人（昭和二十年死亡）。
橘大仁（たちばなだいじ）――絃子の夫（昭和十七年死亡）。
橘醍醐（たちばなだいご）――橘大仁の弟。荒川神社の神主（48歳）
浅井重吉（あさいじゅうきち）――琴子の最初の夫。貿易商（？）。
瀧川義明（たきかわよしあき）――琴子の前夫。音楽家（49歳）。
大権寺瑛華（だいごんじえいか）――霊能力者（52歳）。
沖美、明美（おきみ、あけみ）――双子の巫女（10代？）。
成瀬正樹（なるせまさき）――笛子の婚約者。八王子成瀬紡績の御曹子（35歳）。
麻田茂一（あさだしげいち）――ブラジルの農園主（66歳）。

〈脇　役〉

朱鷺沢康男（ときざわやすお）――一ッ橋大学教授。
三峰光太郎（みつみねこうたろう）――一ッ橋大学助教授。
貝山公成（かいやまきみなり）――喫茶店《紫煙》の店長。
貝山玉絵（かいやまたまえ）――貝山公成の娘。
秋山豪介（あきやまごうすけ）――陸軍将校。清乃の後ろ盾（亡）。
九段晃一（くだんこういち）――多摩日報の新聞記者。

〈警察官〉

中村寛二郎（なかむらかんじろう）――三多摩署警部。
村上郁夫（むらかみいくお）――三多摩署刑事。
京本武司（きょうもとたけし）――昭和二十年当時の三多摩署警部補（亡）。
波川六太郎（なみかわろくたろう）――三多摩署の検死医。

〈名探偵〉

二階堂蘭子（にかいどらんこ）――主人公。

〈記述者〉

二階堂黎人（にかいどうれいと）――私。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erto

装幀——菊池千賀子
装画——中原　脩

吸血の家

原书缺页

原书缺页

《血吸い姫》の話

——江戸時代の文政年間とも、天保年間のこととも言われています。

或るお旗本のお家がお取り潰しになりました。そこのお姫様が、突然の境遇の変化の果てに、非運にも女郎屋に売られてしまったのです。この姫様は名を翡翠といい、十七になるとても美しい娘でした。売られた先は、武州の八王子、甲州街道は横山宿の大通りにある《久月楼》という飯盛り旅籠でした。彼女はそれも自分の運命と諦め、健気に、気高くふるまっておられました。

育ちの良い翡翠姫は、生来の美貌に加え、教養があり、芸事にも秀でていましたから、すぐに宿場で一番の売れっ子になりました。《久月楼》の主人は、彼女を吉原の太夫のように着飾らせて破格の値段で扱ったので、かえってそれが評判になりました。

女郎の多くは、たいてい貧しい農家の娘が、一握りの飯代の代わりに証文一枚で身売りされて来るものです。躾さえもできていません。それに較べれば、翡翠姫と他の女郎たちの商品価値は、最初から勝負がついていたと言えましょう。

《久月楼》には、その頃、二十歳になる千代太郎という跡継ぎの息子が一人おりました。千代太郎は、翡翠姫が来た時には、大坂へ奉公へ出されていて留守でした。その千代太郎が奉公先から

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erto